

8世紀前半以前の西三河の須恵器生産

大 西 遼

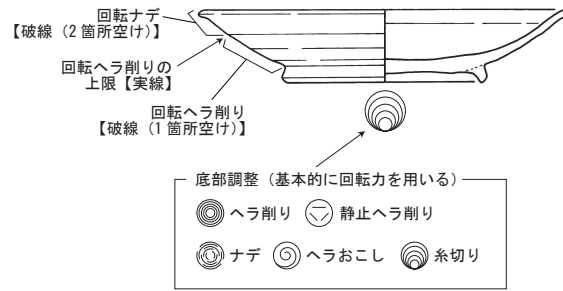
はじめに

西三河は古代から須恵器・瓷器生産の盛んな地域である。その最たる窯業地帯が尾張東部から連なる猿投山西南麓古窯跡群（以下、「猿投窯」とする）である。古代の尾張と三河の地理的な境界をどこに引くかについて、ここで議論する余裕はないが、ひとまず境川を境界にした場合に、境川以東のエリアに猿投窯黒笹地区の大部分と井ヶ谷地区が位置している。郡域としては、黒笹地区の大部分は賀茂郡、井ヶ谷地区が碧海郡に相当するが、両地区はとりわけ8世紀後半から9世紀代の猿投窯の中核を担い、活発な須恵器・瓷器生産を展開した。当該期の猿投窯製品が全国各地に流通している事実は、西三河の窯業地としての重要性を物語っている。

さて、猿投窯黒笹地区・井ヶ谷地区を中心とする西三河の古代窯跡の分布は、先学諸氏の業績により面的な分布、時期的な展開の様相が把握できる状況となっている（本多 1955・1957a～c、檜崎 1956～1959、谷沢・加藤・久永 1958、神谷・森・大橋・伊藤・沢田ほか 1968、伊藤・加藤・齊藤編 1980、齊藤・伊藤・加藤編 1983、井上 2010、愛知県史編さん委員会 2015 等）。これらによると、西三河地域は8世紀後半以降に急速に発展し、猿投窯の中核を担うようになるが、それ以前の8世紀前半以前には分布的にもまとまりをあまり見せず、継続的な窯業地の形成は顕著でない。賀茂郡にやや窯数は多いが分散しており、碧海郡、額田郡については1か所ずつ程しか確認できていない。

ただ、尾張東部や尾張北部に、猿投窯の諸地区や尾北古窯跡群（尾北窯）というまとまりのある窯業地が存在するにも関わらず、古墳時代後期以降点々と西三河に窯跡がみられることは事実である。尾張からの流通のみに頼るのではなく、地域に必要なものとして須恵器窯が組織されたと考えれば、西三河の地域史を考える上で無視できない対象である。また、西三河側の猿投窯の展開を考える際にも、隆盛する前段階の様相を把握することは、猿投窯研究上も重要である。

賀茂郡に位置する伊保廃寺（伊保古瓦出土地、伊保白鳳寺跡）は、猿投窯黒笹地区を中心に西三河で須恵器生産が急速に拡大する以前の古代寺院であり、古代の西三河の地域開発の一拠点となっていたと考えられるが、須恵器窯の操業も地域開発と連動していたと考えられる。そこで本稿では、8世紀前半以前の西三河地域の窯跡の様相を整理、分析し、古代西三河の地域開発を考究するための基礎的な資料整理としたい。なお、本稿ではとくに断らない場合、猿投窯編年には『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』で提示された編年と実年代観をもちいる（城ヶ谷 2015a）。また、和泉国陶邑古窯跡群（以下陶邑窯とする）の編年には田辺昭三の編年（田辺 1981）、実年代観は山田邦和の研究を参考とする（山田 2011）。また、実測図の表現については、基本的に第1図に示した通りとする。



第1図 本稿の実測図の表現 (大西 2021 に追記)

1. 6・7世紀の上向イ田窯跡群の操業

(1) 上向イ田窯跡群の時期と系譜

現在確認されている西三河最古の須恵器窯は、豊田市亀首町に所在する上向イ田窯跡群である。本窯跡群は賀茂郡内に位置し、須恵器窯5基（上向イ田2～6号窯跡）と中世の白瓷窯1基（上向イ田1号窯跡）の計6基からなる（神谷・森・大橋・伊藤・沢田ほか1968、森ほか2009、服部2014）。須恵器窯である上向イ田2～6号窯跡の時期については、久永春男・田中稔の尾張・三河地方の古墳出土須恵器の編年（久永・田中1966、以下「久永・田中編年」とする）だと、2号窯跡（第4型式）、3・4号窯跡（第2型式）、5・6号窯跡（第3型式）とされている（神谷・森・大橋・伊藤・沢田ほか1968）。猿投窯編年（城ヶ谷和広2015a、以下「城ヶ谷編年」とする）だと、2号窯跡（岩崎101号窯式期）、3・4号窯跡（東山61号窯式期）、5・6号窯跡（東山44号窯式期）とされている（愛知県史編さん委員会2015）。また、本窯跡群の須恵器窯の中では、最も北に位置する上向イ田2号窯跡から北方約1000kmの地点にも、先の久永・田中編年の第3型式に相当する源内2号窯跡があったという（神谷・森・大橋・伊藤・沢田ほか1968）。

なお当窯跡群は、分布上は猿投窯黒笹地区に属し、上向イ田2～6号窯跡も黒笹97～101号窯跡という別称が存在する（愛知県史編さん委員会2015）。ただし、これらの窯跡及び先の源内2号窯跡の時期には、黒笹地区内で他に窯が無く、50年以上の空白期を置いて本格的に黒笹地区の他窯が開窯する。当該期の猿投窯の分布は東山地区に集中しており、かなりの距離を隔てているため、当窯跡群は古墳時代の猿投窯とは異なる窯業地として捉えられるものである。

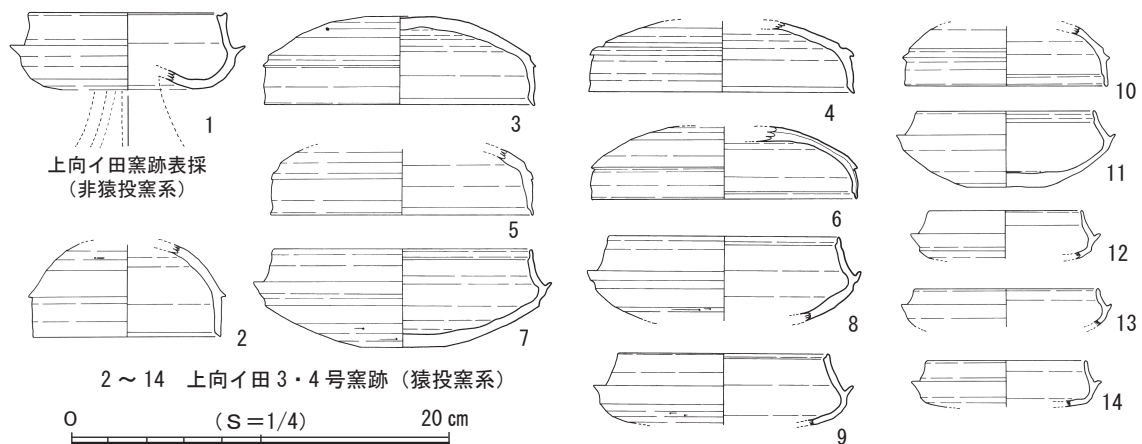
上向イ田窯跡群の内、須恵器・埴輪併焼窯である上向イ田3・4号窯跡が発掘調査され、その内容がはっきりとされている。3号窯跡には1次窯と2次窯が存在し、3号窯跡1次窯及び4号窯跡は同時期であることがはっきりとされている（伊藤・大橋・森・斎藤・久永1969、森ほか2009）。ただし、3号窯跡1次窯と2次窯の時期差については、窯内の出土品が乏しいために、以下異なる考えが提示されている。一つは、灰原の下層と上層出土品との間に型式差が無いため、型式が変わらない程度の期間で1次窯から2次窯へと変遷したという考えである（伊藤・大橋・森・斎藤・久永1969）。もう一つは、2次窯の出土品を猿投窯編年（尾野1997、以下「尾野編年」とする）のⅢ期新段階とし、Ⅲ期古段階に1次窯が開かれ、その後一時生産が途絶え、Ⅲ期新段階に2次窯が築かれるという断絶期間を想定するものである（尾野2009）。なお尾野編年Ⅲ期古段階は城ヶ谷編年東山61号～蝮ヶ池窯式期、同Ⅲ期新段階は同東山15号窯

式期に相当する。本稿では、後者の尾野の考えを取り、3号窯跡1次窯及び4号窯跡が東山61号窯式期、3号窯跡2次窯が東山15号窯式期として話を進める。

上向イ田3・4号窯跡出土品は、大きく古相（第2図-3～9：東山61号窯式）・新相（第2図-10～14：東山15号窯式）の二つに分かれ、先述に従い古相が3号窯跡1次窯ないし4号窯跡、新相が3号窯跡第2次窯の生産品となる。古相・新相とも、基本的に同時期の猿投窯産須恵器と形態・技法が共通し、胎土や焼成の様子も酷似している。当窯については、猿投窯東山地区からの須恵器工人の出張を想定する見解もあり（尾野2009）、それを首肯できる程に、出土須恵器に非猿投窯的要素は認められない。

ただし、上向イ田窯跡群で注意が必要なのは、上向イ田窯跡群採集の有蓋高杯である（第2図-1）。当資料は6世紀代の上向イ田3・4号窯跡よりもあきらかに古いものとして紹介されているが（尾野2009）、透孔の割付刻線が杯部底部に残っており、三方透孔に復元される。このことから、本資料は陶邑窯の須恵器編年（田辺1981）の高蔵寺23・同47型式期に比定される陶邑窯系有蓋高杯と解される（大西2017）。また、第2図-2は壺蓋として紹介されているが（森ほか2009）、短頸壺や连接器の蓋であれ、口縁端部は通常の杯蓋と類似した形態を取ると考えられる。しかし、東山61号窯式期における杯蓋で、直線的な口縁部や、第2図-2のような角度の直線的でシャープな面取をもつ口縁端部は異質で、天井部が比較的高く復元されることも含めると、高蔵寺23・同47型式の陶邑窯系の杯蓋として捉え得る可能性がある（大西2019a）。

以上、上向イ田窯跡群の須恵器窯の系譜・変遷を整理すると、5世紀後葉の高蔵寺23・同47型式期に陶邑窯系の須恵器窯が操業した後、6世紀中葉の東山61号窯式期に3号窯跡1次窯と4号窯跡が須恵器・埴輪並焼窯として操業、6世紀末から7世紀初頭の東山44号窯式期に5・6号窯跡が須恵器専焼窯として操業、続いて東山15号窯式期に改築された3号窯跡2次窯が須恵器専焼窯として操業、7世紀中葉の岩崎101号窯式期に2号窯跡が須恵器専焼窯として操業し、終焉を迎えた。



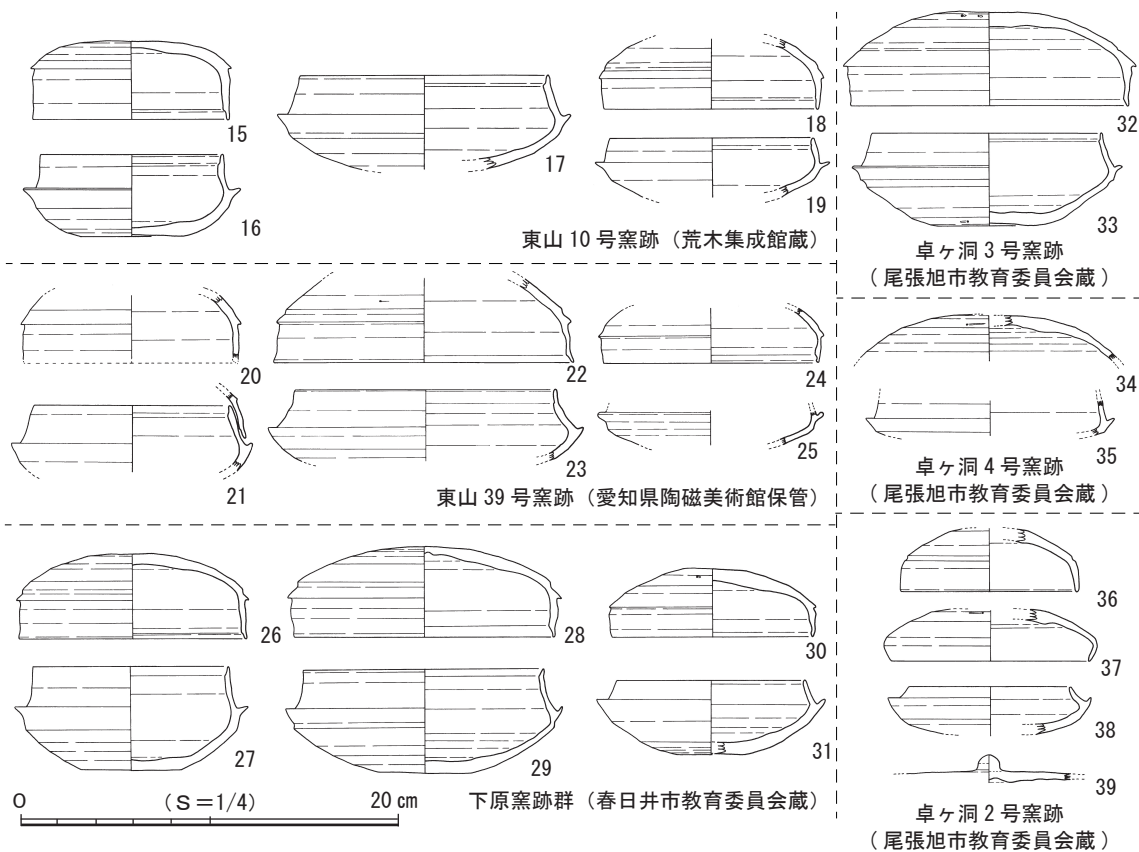
第2図 上向イ田窯跡出土資料（豊田市蔵／実測図：大西2019a）

(2) 上向イ田窯跡群の操業空白期をめぐって

上向イ田窯跡群の須恵器生産の変遷の中で、5世紀後葉と6世紀中葉の操業の間にあたる6世紀前葉、6世紀中葉と6世紀末の操業の間にあたる6世紀後葉に二つの空白期がある。6世紀前葉については、前後の須恵器生産が陶邑窯系窯と猿投窯系窯というように系譜を異にするため、空白があってもむしろ不思議は無いが、6世紀後葉については前後ともに猿投窯系窯の操業であり、この空白期について少し考えてみたい。

拙稿で筆者は、猿投窯系窯の操業時期に注目し、ほぼ一時期に集中的に操業されて終焉するものと（Ⅰ型操業）、集中的な操業の後、半世紀前後の空白を挟み再び操業され終焉するもの（Ⅱ型操業）の二つに大別した。また、Ⅱ型操業については、猿投窯系窯だけではなく、猿投窯自体においてもしばしば認められることを述べた（大西 2019a）。以下、まず猿投窯内の窯の事例について、拙稿の内容にいくつかの補足事項を交えつつ述べる。

名古屋市千種区鹿子町の東山10号窯跡出土品には、東山10号窯式期の資料（第3図-15～17）が中核をなす一方で、一部に東山44号窯式期に比定できる資料が含まれており（第3図-18・19）、半世紀程の空白期がある。ただし、本窯の出土品については、近くの東山6号窯跡の焼成品が混じっている可能性が指摘されている（荒木 1974）。東山6号窯跡の出土品については、尾野編年Ⅲ期中段階（城ヶ谷編年東山44号窯式期）の資料として紹介されており（尾野 1997）、東山10号窯跡出土の東山44号窯式期の資料は東山6号窯跡のものと時期的に一致する。異なる2窯の生産品であるにせよ、近接した場所で半世紀ほどの空白をもって須恵器生産が行われている状況には変わらない。



第3図 尾張地域の参考窯跡出土資料（猿投窯系／実測図：20～25（大西 2018）、その他（大西 2019a）

名古屋市千種区園山町に所在する、東山 39・61・118 号窯跡という近接した 3 基については、近年調査・研究の進展があった。東山 61 号窯跡については既に 1986 年には生産品の内容が把握されていたが（齊藤 1986）、その後の発掘調査によって、本窯の灰原から東山 61 号窯式期に相当する一群、東山 10 号窯式期に相当する一群、東山 44 号窯式期に相当する一群が出土した。とくに東山 10 号窯式期に相当する一群については、隣接する東山 39 号窯跡に由来するものと想定された（尾野 2010）。東山 39 号窯跡については、表採資料から東山 61 号窯式期に相当する資料が大半を占め（第 3 図 - 22・23）、わずかに東山 10 号窯式期に相当する資料（第 3 図 - 20・21）、東山 44 号窯式期に相当する資料（第 3 図 - 24・25）が混在している（大西 2018）。大半が東山 61 号窯式期に相当する資料であるが、本資料群が表採資料であることを考慮すると、東山 61 号窯跡の灰原の資料が大量に混在している可能性がある。その後の調査で、新たに東山 39・61 号窯跡とは異なる東山 118 号窯跡灰原の存在がきらかとなり、これが東山 61 号窯跡灰原でみられた東山 44 号窯式期の資料の生産窯であることが示された（梶原・田中 2020）。先述した東山 39 号窯跡表採資料に含まれる東山 44 号窯式期に相当する資料も、本窯の生産品と考えられる。3 窯とも窯体は未確認であるが、少なくとも近接して東山 10 号窯式期、東山 61 号窯式期、東山 44 号窯式期と 3 時期の操業があり、蝮ヶ池窯式期にあたる 6 世紀後葉頃に須恵器生産の空白期が認められる。

以上猿投窯における II 型操業の事例を述べたが、猿投窯系窯に話を戻す。拙稿（大西 2019a）では I・II 型操業の猿投窯系窯について詳述したが、ここでは上向イ田窯跡群が該当する II 型操業に限定して、他窯の事例を簡単に紹介する。

春日井市東山町の下原窯跡群は、須恵器・埴輪併焼窯を含む 11 基の窯により構成される。その内 6～7 世紀に属するのは、下原 2・3・4・6・7・8・10 の 7 基であるが、窯内で原位置をとどめた出土品の少なさや、複数窯の資料が混入するような状態の灰原であったこと等から、出土遺物の焼成窯を特定することは困難である（浅田 2006・2015）。出土品は一部の例外を除き猿投窯系須恵器であり（大西 2019a）、東山 10・61 号窯式期（第 3 図 - 26～29）と、東山 15・岩崎 101 号窯式期（第 3 図 - 30・31）の概ね 2 時期に分かれるが、6 世紀後葉から 7 世紀初頭にかけての空白期が認められる。

尾張旭市霞ヶ丘町に所在する卓ヶ洞窯跡群は、埴輪併焼窯を含む 1～6 号窯跡の 6 基の須恵器窯により構成される（内山 1978、岡本ほか 2016）。出土須恵器は総じて猿投窯系であり、1 号窯跡及び 3・4 号窯跡は東山 61 号窯式期（第 3 図 - 32～35）、2 号窯跡は岩崎 101 号窯式期（第 3 図 - 36～39）の操業であり、6 世紀後葉から 7 世紀前葉にかけての空白期が認められる。

静岡県袋井市岡崎に所在する衛門坂窯跡群は、未完成窯として報告されている 1 号窯跡と、須恵器・埴輪併焼窯を含む 2～5 号窯跡という 5 基の窯で構成される（永井 1989）。当窯跡群は、猿投窯系の要素をもつ窯跡群として指摘されてきたが（岩崎 1987）、実際には猿投窯系と陶邑窯系の須恵器が並存する（大西 2019a）。2～4 号窯跡では東山 10 号窯式期の猿投窯系須恵器と（第 4 図 - 40）、陶器山 15 型式期の陶邑窯系須恵器が出土している（第 4 図 - 41・42）。後者については、静岡県浜松市半田町の有玉窯跡と共通する特異な形態の焼台（第 4 図 - 43）の出土から（鈴木 2004）、両窯跡群には同系工人集団が関与したものと考えられる。5 号窯跡では岩崎 101 号窯式期の猿投窯系須恵器と（第 4 図 - 44・45）、高蔵寺 217 型式期の陶邑窯系須恵器が出土している（第 4 図 - 46・47）。2～4 号窯跡と 5 号窯跡では、ともに異系

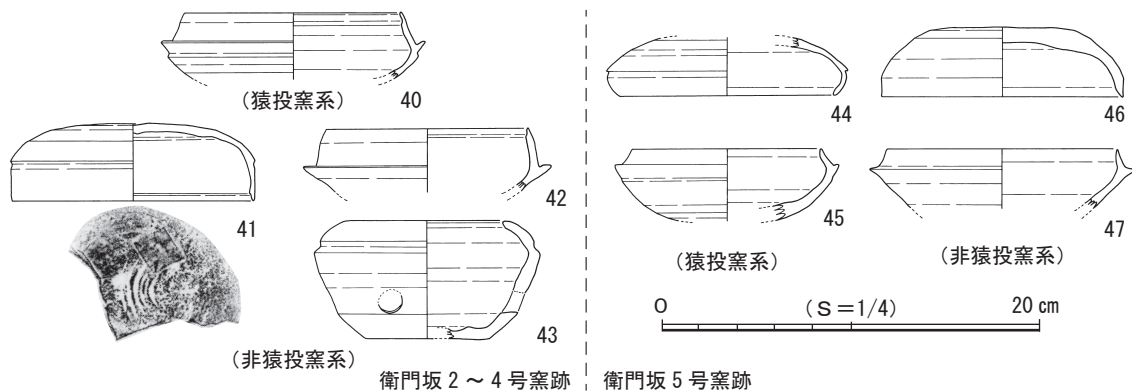
譜の資料が出土しているが、時期的には6世紀中葉から7世紀前葉にかけての空白期が認められる。

以上、猿投窯及び猿投窯系窯のⅡ型操業に関して述べたが、東海地方の猿投窯系以外の窯についても、Ⅱ型操業と同質の途中空白期をもつ窯が存在する。ここでは以前に拙稿（大西 2019b）で分析した伊勢の窯跡から、いくつか事例を述べる。

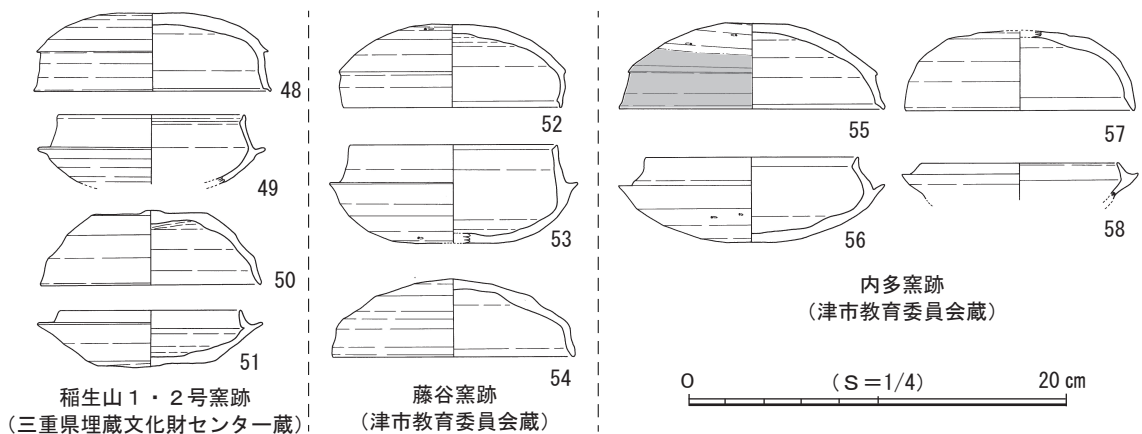
三重県鈴鹿市稲生町に所在する稲生山1・2号窯跡は、近接する2基の窯で、灰原から須恵器・埴輪が出土している（小玉 1996）。2基の窯の生産品は明確に分離できないが、古相（第5図－48・49）と新相（第5図－50・51）の資料が混在する。大局的には古相・新相とも陶邑窯系須恵器であり、前者が高蔵寺23型式期、後者が高蔵寺217型式期に属し、6世紀を中心に100年以上の空白期を有する。

三重県津市半田に所在する藤谷窯跡は、近接する2基の窯で構成され（萱室・藤田 2000）、須恵器と埴輪が出土しているが、古相（第5図－52・53）と新相（第5図－54）の資料が混在する。大局的には古相・新相とも陶邑窯系須恵器であり、前者が高蔵寺47～陶器山15型式期、後者が高蔵寺217型式期に属し、6世紀を中心に100年程度の空白を有する。

最後に三重県津市安濃町に所在する内多窯跡は、近接する3基の窯で構成され、須恵器と埴輪が出土している（米山 2000）。古相（第5図－55・56）と新相（第5図－57・58）の資料が混在するが、双方とも大局的には陶邑窯系須恵器であり、前者が陶器山15号型式期、後者が高蔵寺217型式期に属し、6世



第4図 遠江地域の参考窯跡出土資料（衛門坂窯跡群：袋井市教育委員会蔵）



第5図 伊勢地域の参考窯跡出土資料（非猿投窯系／実測図：大西 2019b）

紀を中心に100年程度の空白期を有する。

以上みてきたように、5世紀後葉から7世紀にかけて、半世紀程度のものを中心にⅡ型操業の窯業地が複数存在し、長いものでは100年程にも及ぶ空白期を挟む場合もある。東海地方全域をくまなく分析したわけではないが、今回取り上げた窯跡だけでも、陶邑窯系、猿投窯系の別に限らず、少なくとも東海地方ではⅡ型操業のようなあり方が普通に存在していたと考えられる。空白期を挟んでの操業が上向イ田窯跡群だけの特殊な事例でないことは、下原2号窯跡を引き合いに既に指摘されていた(尾野2009)。今回より多くの窯業地、猿投窯系・陶邑窯系という別系統の窯跡でみられたことで、東海地方の須恵器生産のあり方の一つとして、Ⅱ型操業のようなあり方が稀なものではないことがみえてきた。

ただし、ここで陶邑窯系窯とした伊勢の各窯については、製作技法や形態から、系統と一応の陶邑窯編年の型式を述べたが、東海地方では、陶邑窯系窯であっても、単純に陶邑窯編年から時期・時期幅を決定できないことが判明しつつある。5世紀後葉から6世紀前葉については、拙稿で三重県域の各窯の資料を形態、器種組成から比較、序列した際に、個別器種の形態的には高蔵寺47型式期にみえるような窯が、陶器山15型式期まで下ると考えられるものが存在していることを示した(大西2019b)。今回取り上げた窯だと、津市の藤谷窯跡については、単純な形態的には高蔵寺47型式期を中心とする時期にみえるが、陶器山15型式期に下る可能性も想定し、想定幅を取っている。また、7世紀については、北勢地域において、形態・技法的に陶邑窯系と取れる北勢在地窯系の合子形の蓋杯について、法量の縮小化が遅れる傾向があることがあきらかにされている(水橋2021)。南勢地域についても、これまで形態・技法的に陶邑窯系と取れ、7世紀前半とされていた明気1・2号窯跡の年代が、蓋杯の分析から7世紀半ばに下る可能性が指摘されている(稲垣2020)。以上のように、伊勢の窯跡の年代観には今後再検討が生じる部分が多いと考えられるため、本稿で示した陶邑窯編年の型式期と、操業空白期の年代幅については、振れ幅をもつ可能性が高いことを断っておきたい。

さて、Ⅱ型操業とひとくくりに言っても、上向イ田3号窯跡の1次窯・2次窯のように、同じ窯体を再利用する場合と、尾張旭市卓ヶ洞3・4号窯跡と2号窯跡のように近い場所で操業するものの窯体は新たに別に作る場合があり、その意味合いは多少異なるものと考えられる。これについては、今後の課題としておきたい。ただ、猿投窯系窯のⅡ型操業については、本体である猿投窯東山地区で連綿と須恵器生産が継続していることから、一度目の操業を終えた須恵器工人たちは一度猿投窯へと戻り、二度目の操業の際に新たに猿投窯系工人が招集されたものと考えられる。再び同じ窯場へと戻ってくる理由には、以下の二つが考えられる。一つ目は、製品の供給先等にかかわる在地の有力者の要望による選地が考えられる。二つ目は、単純に一度目の操業で生産が確実にできる土地だと判明しており、半世紀を経てもそのことが伝えられていたとも考えられる(大西2019a)。前者の場合は、新旧の在地有力者の土地利用の方針が一致していたため、偶然にも新旧の窯場が一致した可能性もあるが、実際には前者と後者の理由が相互的に働き、同一の窯場が選ばれた可能性が高いだろう。その点で、春日井市下原2号窯跡とともに、上向イ田3号窯跡(1次窯・2次窯)は、確実に半世紀後にかつての窯体を利用する形で二度目の操業を行っているものであり(浅田2006・2015・森ほか2009)、先述したように、窯場の条件が後の猿投窯系工人たち、あるいは工人を招集した在地の有力者等により情報が伝聞されていたことを示す、有力な証拠となる。

2. 8世紀前葉までの額田郡・碧海郡の窯跡

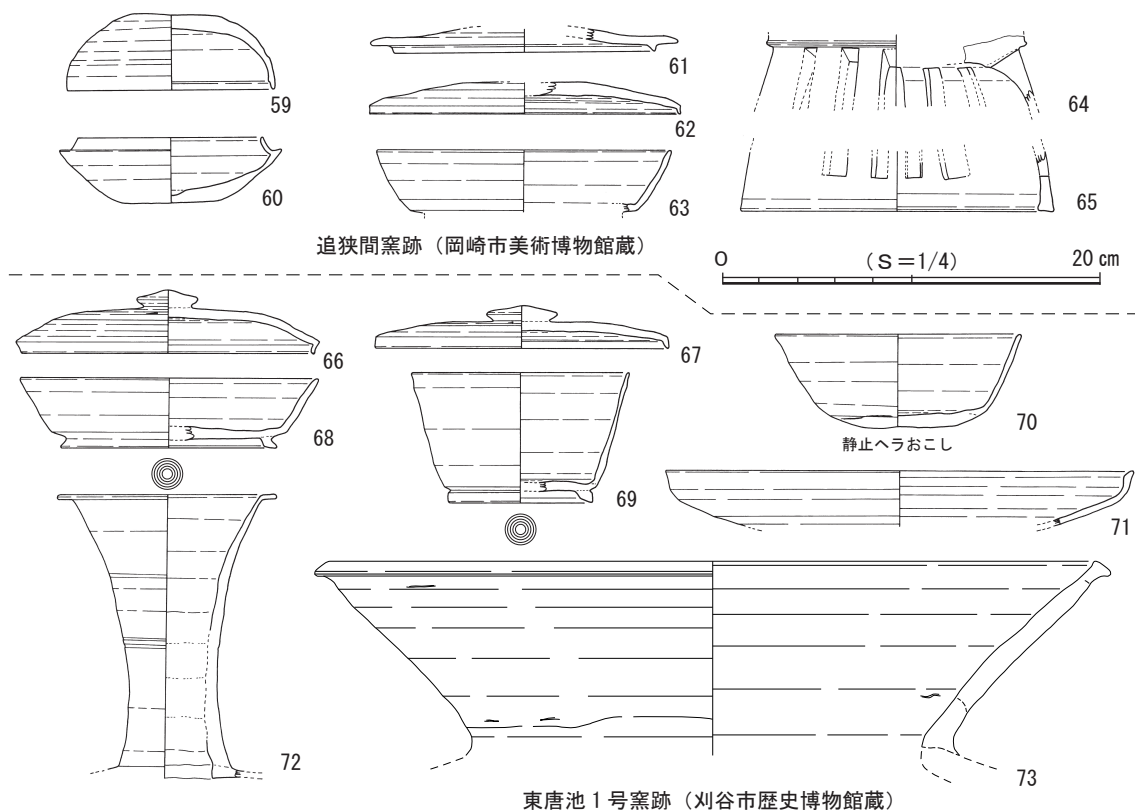
前章で扱った上向イ田窯跡群にせよ、後章で扱う猿投窯黒笹地区の窯跡にせよ、西三河の8世紀前半以前の窯跡は賀茂郡に分布するものが大半である。しかし、ここで扱う額田郡・碧海郡には、わずかながら8世紀前葉までの窯跡が知られている。なお、碧海郡では8世紀後半以降、猿投窯井ヶ谷地区の須恵器・瓷器生産が展開する。額田郡では9世紀以降幸田窯で瓷器生産が展開するが（愛知県史編さん委員会2015）、本稿で扱う8世紀前葉までの窯跡とは時期的に断絶している。

(1) 額田郡 追狭間窯跡

追狭間窯跡は、岡崎市滝町に所在する須恵器窯である。窯体は単独で1基確認されており、発掘調査が実施されている（兵藤・太田・竹内・脇田1961）。出土遺物の実測図を伴う記述は『新編 岡崎市史 史料 考古 下 16』にて行われており、合子形の蓋杯、高杯、脚付椀、壺の実測図が示され、実測図は無いが甕胴部の破片の出土が述べられている。この時、出土須恵器の時期は6世紀末～7世紀初頭とされているが（斎藤1989）、その後7世紀前半に比定する考えも示されている（贅2015）。ただ、本窯に関する最初の報告では、出土遺物には「古墳時代のものと奈良時代のもの」があると記されているが（兵藤・太田・竹内・脇田1961）、その後の文献では7世紀代に比定される資料のみが記載されており、矛盾が生じている。

そこで今回、未報告資料を含む、追狭間窯跡出土須恵器の調査を行った結果、いくつかの新しい知見が得られた。第6図-61・62は杯蓋、63は有台杯身、64・65は円面硯であり、これまでに取り上げられてこなかった資料である。61は天井部に鈕をもつタイプの杯蓋で、口縁部にはかえりを有している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。62も天井部に鈕をもつタイプの杯蓋だが、口縁部にかえりは無く、下方へ折れるのみである。内面及び口縁部外面は回転ナデ、天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられる。63は底部の欠失部下面にわずかに下方へ曲がるような様子があるため、無台ではなく有台の杯身と考えられる。61・62とセットになるもので、口縁部下方及び底部の外面は回転ヘラ削り、口縁部上方と内面は回転ナデにより仕上げられる。64・65は色調、焼成、技法、器厚等から、接合はできないが同一個体の可能性が考えられるものである。脚基部に突帯をもち、脚部は内湾しつつ外へ開き、断面がやや撥形となる脚端部はほぼ水平に接地する。脚部には長方形の透孔を複数もつ。第6図-59・60は合子形の蓋杯で、既に実測図の掲載や報告がなされているものだが、杯蓋天井部、杯身底部は回転ヘラ削りはなされず、未調整の状態である。それ以外は回転ナデにより仕上げられる。杯蓋の稜は消失し、やや凹むような形になり、口縁端部には段がある。杯身の立ち上がり端部は段が無く、丸く収める。

最初の報告（兵藤・太田・竹内・脇田1961）で「古墳時代のもの」とされたのは第6図-59・60等であると考えられ、「奈良時代のもの」とされたのは第6図-61～65等の一群であった可能性が考えられる。この際に問題となるのが、本窯の操業が二時期に分かれて捉え得るかである。あるいは本窯の近くに時期の異なる他窯、あるいは窯以外の遺構が存在しており、混入した可能性も考えられる。ただ、現状本窯は単独窯として捉えられており、発掘時に遺物が混在するほど、他窯や他遺構が近くにあった、あるいは存



第6図 額田郡・碧海郡の窯跡出土資料

在する可能性があることは報告でも示されておらず、まずは出土品のすべてを本窯の生産品として考えてみたい。

まず、第6図-61～65の新しい要素を示す資料群について、同一時期として良いか考えたい。本群は猿投窯の須恵器と特別異なる形態・技法を見出せず、猿投窯系須恵器として扱う。杯蓋については、口縁部にかえりのあるものと無いものが出土しており、岩崎17号～岩崎41号窯式期の特徴とされる(城ヶ谷2015a)。口縁部にかえりの無い杯蓋は、後の高蔵寺2号窯式以降にも続くが、形態的に第6図-62を前記の岩崎17号～岩崎41号窯式期に想定しても違和感はない。63の有台杯身、64・65の円面硯も、この時期にあっても違和感のない形態である。

次に第6図-59・60の合子形の蓋杯について、杯蓋の稜の消失後に口縁端部に段をもつのは猿投窯では一般的でない現象だが、杯蓋稜の消失や、杯蓋天井部、杯身底部の回転ヘラ削りを省略する点は猿投窯でもみられる現象である。やや地方窯として変容していることは否めず注意が必要だが、ひとまず猿投窯編年にあてはめて考えてみる。猿投窯において、合子形蓋杯は岩崎17号窯式期まで残存し、杯蓋では稜を省略するようになる。また、杯蓋・杯身の天井部・底部の回転ヘラ削りも省略するようになる(城ヶ谷2015a)。以上の点は第6図-59・60の蓋杯と合致している。以上のことから、追狭間窯跡出土須恵器は、総じて岩崎17号窯式期(7世紀第3四半期)の一時期に比定できるものと考えられる。

(2) 碧海郡 東唐池 1 号窯跡

東唐池 1 号窯跡は豊田市中田町に所在する須恵器窯である。詳細な発掘調査はなされておらず、採土現場において資料が採集されているが、現在は滅失している（谷沢 1956、杉浦・久永ほか 1997）。

本窯は、当初洲原 6・8 号窯跡（井ヶ谷 9・18 号窯跡：折戸 10 号窯式期）の製品との様式差が分析された。その後、東唐池 1 号窯跡は奈良朝須恵器第 2 期（7 世紀末～8 世紀前葉）の代表的な窯として扱われているが（久永 1969）、後に平城宮土器Ⅱ（小笠原・西 1976）の須恵器に様式・製作技法が共通するところが多いとして、8 世紀前葉に比定されている（久永 1997）。近年では、高蔵寺 2 号窯式期のものを主体に、一部岩崎 41 号窯式期に遡るものも含まれていると評価されている（永井 2017）。

第 6 図 - 66～73 は東唐池 1 号窯跡出土須恵器である。66・67 は杯蓋で、前者は天井部がやや高く、後者は天井部がより低く平坦な器形である。口縁部は単純に折れて口縁端部へと至り、端部が強く屈曲しない。68・69 は有台杯身で、67 は標準的な法量だが、69 の法量は 67 と比較して口径に対して器高が高い。双方とも底部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、高台の断面形は矩形または台形を呈するが、68 はほぼ水平、69 は外端で高台端部が接地する。底部から口縁部の間には比較的明瞭な折れがあるが、高台は底部の縁辺に比較的近い部分に付けられる。70 は無台杯身で、底部は静止ヘラおこし未調整で、底部から口縁部の境界がやや不明瞭である。71 は皿ないし盤である。72 は肩の折れる台付長頸瓶で、頸部はかなり長めで、中位に二重沈線が二段に施されるが、上段のものはかなり弱々しい。口縁部は外反して立ち上がった後、折れて外方に引き出された形となる。73 は甕で、直線的に外方に開いたのち、口縁端部断面がやや撥形を呈するように、内外方へ拡張される。

出土須恵器の様相をみると、形態・技法の特徴は、猿投窯や猿投窯系窯の尾北窯と共通しており、猿投窯系の須恵器窯として捉えることができる。奈良時代前半期の猿投窯の窯式である高蔵寺 2 号窯式と岩崎 25 号窯式の特徴と比べると（楢崎 1983、楢崎・齊藤 1984、城ヶ谷 2015a）、無台杯身の形状や有台杯身の高台形状等は岩崎 25 号窯式に近いものと考えられる。一方で台付長頸瓶や甕の形態の特徴は高蔵寺 2 号窯式に近く、岩崎 25 号窯式の重要な一指標とされる粘土塊轆轤水挽と底部糸切技法を採用した無台碗については、本窯で出土が確認されていない。そのため、積極的に岩崎 25 号窯式期に比定することは難しいが、高蔵寺 2 号窯式期を基本に、やや岩崎 25 号窯式期にかかるような時期に本窯の操業時期を求めておきたい。

なお、東唐池 1 号窯跡出土須恵器（杉浦・久永ほか 1997）には、実見の結果、一部鳴海 32 号窯式以降に比定すべき資料が認められた。例えば底部に回転糸切を残す半球形に近い無台碗もみられるが、器壁が他の大部分の杯類と比較して極めて薄く、異質な印象を受けることから、岩崎 25 号窯式期ではなく鳴海 32 号窯式期以降のものとして捉えたい。本窯と約 80m 離れて東唐池 2・3 号窯跡があり、発掘調査により中世の白瓷窯であることが判明しているが、周辺からの流れ込みとみられる鳴海 32～折戸 10 号窯式期の須恵器が少量出土している（服部 2014、永井 2017）。東唐池 1 号窯跡出土の鳴海 32 号窯式期以降の資料についても、同様に周辺からの流れ込みとみられるが、東唐池 2・3 号窯跡出土須恵器とも合わせて、当地に鳴海 32 号窯式期以降の須恵器窯が存在していた可能性も想定できる。

東唐池 1 号窯跡及び 2・3 号窯跡を猿投窯の一古窯群として捉えるか、別の窯業地として捉えるかにつ

いては、現意見が分かれている。前者の例として、直接的に本窯跡群が示されているわけではないが、『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』（Ⅰ）には、本窯跡群と同様、豊田市中田町に所在する井ヶ谷26～28号窯跡（黒笹126～128号窯跡）が井ヶ谷地区の窯跡として地区分けされている（伊藤・加藤・齊藤編1980）。『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』では、東唐池1号窯跡が猿投窯の一覧表の中に含まれている（愛知県史編さん委員会2015）。『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』『豊田市西部の山茶碗窯跡』では、東唐池2・3号窯跡が猿投窯内の窯跡として捉えられている（愛知県史編さん委員会2007、服部2014）。

後者の例として、逢妻女川下流域右岸の丘陵の西側を猿投窯井ヶ谷地区とし、丘陵東側斜面端部に位置する東唐池1～3号窯跡を猿投窯とは切り離す考えがある（永井2017）。また、『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』の地区別・時期別窯跡数の表（高蔵寺2号～百代寺窯式期）では、井ヶ谷地区で窯が最初にカウントされているのは鳴海32号窯式期となるため、高蔵寺2号窯式期の本窯のことは、井ヶ谷地区に含めず作成されているものと思われる（愛知県史編さん委員会2015）。なお、『愛知県古窯跡群分布調査報告』（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）に掲載された地区別・時期別窯跡数の表では、井ヶ谷地区で窯が最初にカウントされているのは岩崎41～高蔵寺2号窯式期の1基であり、明記はされていないがこの1基は東唐池1号窯跡であると考えられる（齊藤・伊藤・加藤編1983）。

以上、東唐池1号窯跡及び2・3号窯跡について、本稿ではいずれの考えが妥当か決定することは難しい。ただ、井ヶ谷地区の一部として捉えるならば、現状で当地区最古の窯となり、猿投窯の拡大過程を考える上で重要な窯跡であることは間違いない。出土須恵器の内容をみると、当該期の猿投窯の他地区と大きく異なることから、猿投窯工人の手による操業であることは疑いなく、現状としては井ヶ谷地区の中で捉えても大きな問題は無いものと考えられる。ただし、先述のように東唐池1号窯跡出土須恵器が、岩崎25号窯式期へ移行するような様子がありつつも、高蔵寺2号窯式期を中心時期とすることを考えると、上向イ田窯跡群と黒笹地区の他窯にある50年以上の空白程ではないが、井ヶ谷地区で再び操業が開始される鳴海32号窯式期以降の窯とは、ある程度の空白期をもつ。また、東唐池1号窯跡と、鳴海32号窯式期以降井ヶ谷地区の主たる窯場となる洲原池周辺とは距離があり、東唐池1号窯跡の地点が核となって井ヶ谷地区が成立するような流れが見出しにくいという状況もあり、本窯の西三河の窯業における位置づけは課題を残している。

3. 8世紀前半までの猿投窯黒笹地区の窯跡

(1) 黒笹91号窯跡（下り松瓦窯跡）

黒笹91号窯跡（下り松瓦窯跡、以下「下り松瓦窯跡」と記述する）は、みよし市福谷町に所在する瓦を主体に一部須恵器が出土した窯跡である。本窯は、伊保古瓦出土地（伊保白鳳寺跡、以下「伊保古瓦出土地」と記述する）と同範の川原寺式複弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土したことが早くから注目されてきた（神谷・森・大橋・伊藤・沢田ほか1968、大橋1982）。また本窯跡は、上向イ田窯跡群を除くと黒笹地区最古の窯跡であり、福谷東丘陵で最古の窯跡でもある（井上2010）。

尾北窯では古代の瓦陶兼業窯がみられるが、古代の猿投窯においては、本窯が須恵器と瓦の双方を焼成した唯一の例である点も注目されてきたが、瓦と須恵器の焼成時期をめぐって解釈が分かれている。一つは、瓦と須恵器が同時期あるいは大きな時期差無く操業されたとする考えで、この場合川原寺式軒丸瓦の存在を重視し、7世紀末、猿投窯編年だと岩崎41号窯式期に比定される（井上2010・2015）。また、詳細な記述が無く表での掲載だが、高蔵寺2号窯式期とする考えもある（伊藤・加藤・齊藤編1980）。他方、瓦と須恵器の年代が異なり、瓦を焼成した後しばらくして須恵器を焼成したとする考えがある。瓦と須恵器の年代については、①瓦を白鳳時代、須恵器を奈良時代とする考え（神谷・森・大橋・伊藤・沢田ほか1968）、②瓦の年代は白鳳時代の可能性が高いものの、奈良時代以降に下る可能性も皆無ではないとしつつ、須恵器については岩崎25号窯式期とする考え（尾野1993）、③須恵器の年代を岩崎25～鳴海32号窯式期とし、瓦にのみ自然釉がかかる須恵器と瓦の融着資料の存在から、瓦が須恵器以前に焼成されたとする考え（永井2010a）がある。

②③については、当窯出土の軒丸瓦が伊保古瓦出土地の軒丸瓦と同範でありつつも、範傷の状況や範の進行具合などから当窯のものが後出であるとの考えから、瓦の年代を白鳳期に限定していない。そのため、本窯で焼成された瓦は、伊保古瓦出土地の創建瓦ではなく補修瓦として供給された可能性と、同範であるだけで伊保古瓦出土地ではなく、別の寺院に供給されていた可能性の二つが想定されている（尾野1993、永井2010a）。これについては、最近、縄タタキ目、側面調整、胎土、焼成の違いから、下り松瓦窯跡から伊保古瓦出土地へ瓦は供給されておらず、別の寺院へと供給された可能性が高いことが指摘されている（島田・梶原2021）。3Dデータから作成したオルソ画像による比較によっても、下り松瓦窯跡、伊保古瓦出土地、勸学院文護寺出土の軒丸瓦が同範であることが確認されたが、勸学院文護寺→伊保古瓦出土地→下り松瓦窯跡の順に瓦範が進行しており、やはり下り松瓦窯跡の瓦の供給された寺院は不明とされている（筧2021）。

以上のように、下り松瓦窯跡の出土瓦及び須恵器の理解、本窯自体の猿投窯内での評価は複雑な状況にある。本書では、尾野善裕氏の論考により本窯の須恵器や瓦の位置づけが詳細に論じられており、ここで提示できる新たな見解は無い。ただ、愛知県陶磁美術館保管資料の中に、少量ながら下り松瓦窯跡出土品があり、小片であるが図化した資料の紹介を行う（大西2022）。

第7図-74～78は須恵器である。74は杯蓋で、口縁部は単純に下方へ折れ、端部断面は三角形を呈する。75・76は杯ないし碗の口縁部である。75は直線的に外方に開くが、76は腰にやや屈曲部をもち、外反して口縁端部に至る。77は不明器種の口縁部である。78は平底となる甕である。外面は下方に静止ヘラ削り、上方に平行タタキ痕が残る。内面は粗いナデで仕上げられる。第7図-79～84は瓦で、79・80は丸瓦、81～83は平瓦、84は隅切瓦である。79の焼成は甘く、黄白色を呈する。凹面は摩滅により不明瞭なもの、布目がわずかに認められる。凸面は平行タタキ痕が残る。80は焼成良好で灰色を呈する。凹面は布目がうっすらと確認でき、凸面は縦方向の板ナデが施される。81の焼成はやや甘めで、黄白色を呈する。凹面には糸切痕と布目が確認でき、凸面には縄タタキ痕が残る。82は焼成良好で灰色を呈する。凹面には布目、凸面には縄タタキ痕が残る。83は焼成良好で灰色から黄灰色を呈する。凹面には布目残り、凸面は不定方向ナデにより仕上げられる。84は焼成良好で灰色を呈する。凹面には布目、凸面に

は縄タタキ痕が残る。

須恵器については小片のため不明な部分が多いが、岩崎 41～岩崎 25 号窯式期を逸脱しない範囲と考えられる。瓦については、焼成の甘めなものもあるが、焼成が良好なものの方が多い。丸瓦・平瓦とも凹面に布目がみられる。凸面は縄タタキ痕を残すものが多いが、ナデにより仕上げられるもの、平行タタキ痕を残すものもある。

(2) 黒笹 69 号窯跡

みよし市打越町に所在する須恵器窯で、発掘調査が行われ、当初岩崎 41～岩崎 25 号窯式期に比定された（嘉見 1998）。その後、高蔵寺 2 号窯式期に比定され、明越丘陵最古の窯跡と評価されている（井上 2010）。

第 7 図－ 85 は杯蓋、86 は有台杯身、87 は外面に黄土がハケ塗りされた甕である。85・87 については、高蔵寺 2 号窯式期に比定してもあまり違和感はない。86 は高台の断面形等、岩崎 25 号窯式期以降に下らせても良いような印象があるが、岩崎 25 号窯式の重要な一指標とされる、粘土塊轆轤水挽と底部糸切技法を採用した無台椀の存在が確認されておらず、岩崎 25 号窯式的な要素を一部にもちつつも、概ね高蔵寺 2 号窯式期に落ち着くと考えられる。

(3) 黒笹 93 号窯跡

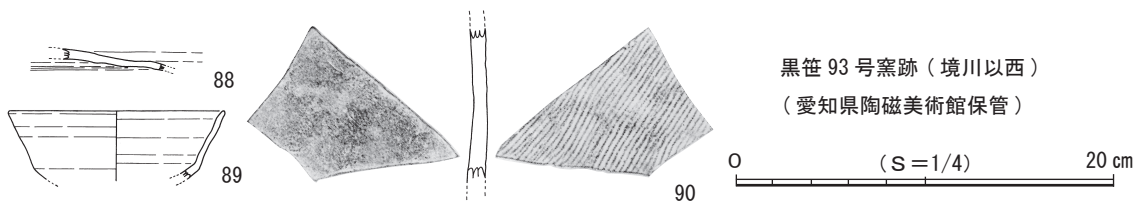
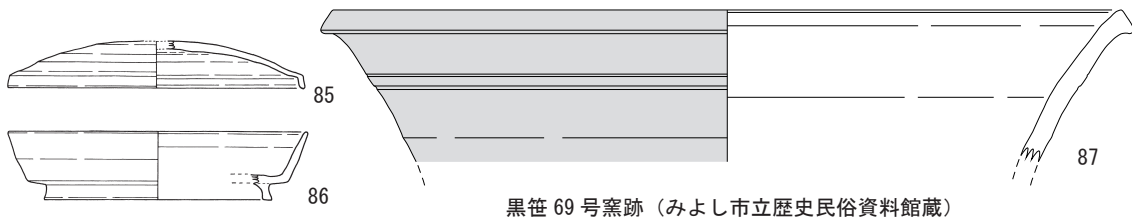
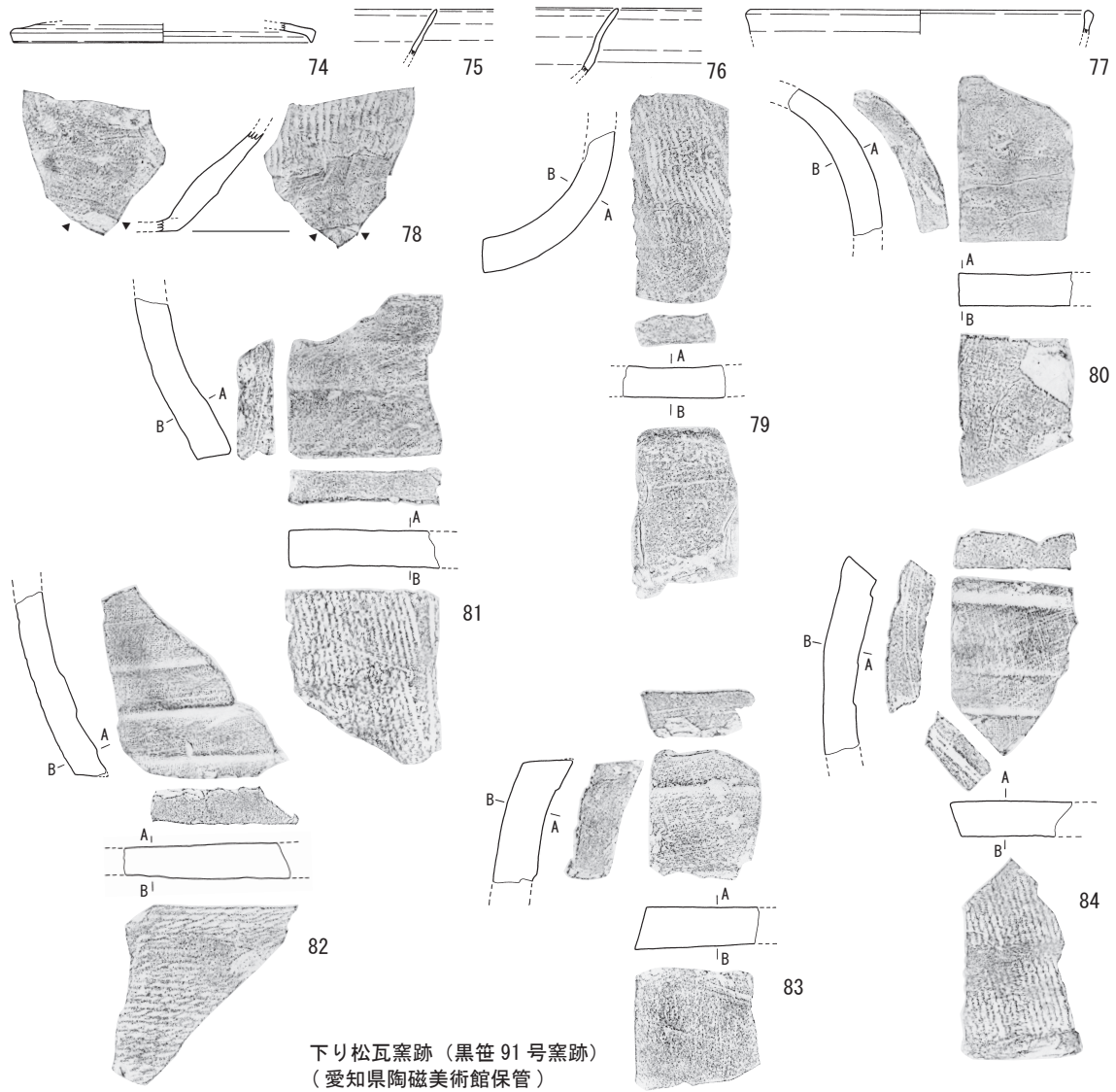
愛知郡東郷町諸輪に所在する須恵器窯で、窯体は滅失するが破片が若干散布するとされている（伊藤・加藤・齊藤編 1980）。境川以西の窯跡となるため、単純に境川の東西で尾張・三河を区分するのであれば、尾張東部の窯跡になるが、黒笹地区の窯跡としてここでは合わせて取り上げることとする。

第 7 図－ 88 は杯蓋、89 は杯身、90 は甕胴部である。小片のため時期を絞り込みづらいが、高蔵寺 2～岩崎 25 号窯式期に比定できる（大西 2021）。

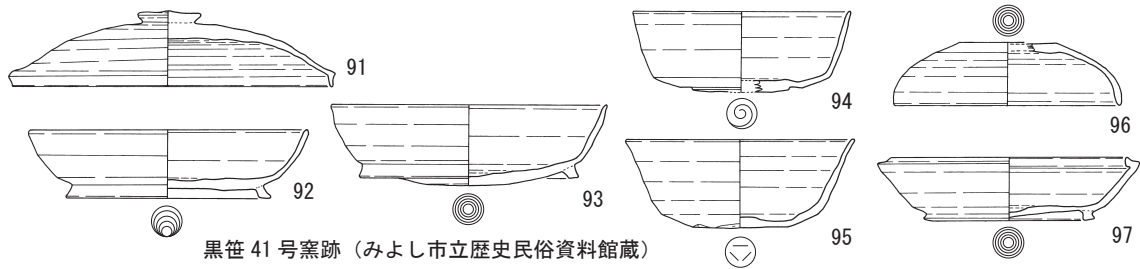
(4) 黒笹 41 号窯跡

みよし市福谷町に所在する須恵器窯で、発掘調査が実施され、当初高蔵寺 2～岩崎 25 号窯式期に比定された（嘉見ほか 1997）。その後、岩崎 25 号窯式期に比定され、黒笹・福谷丘陵で最古の窯跡と評価されている（井上 2010）。猿投窯編年においても、本窯が岩崎 25 号窯式期の代表的資料として示されている（城ヶ谷 2015a）。『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』の地区別・時期別窯跡数の表では、岩崎 25 号窯式は猿投窯内で 3 基のみ示されており（愛知県史編さん委員会 2015）、当該期の窯跡として内容の把握できる数少ない事例でもある。

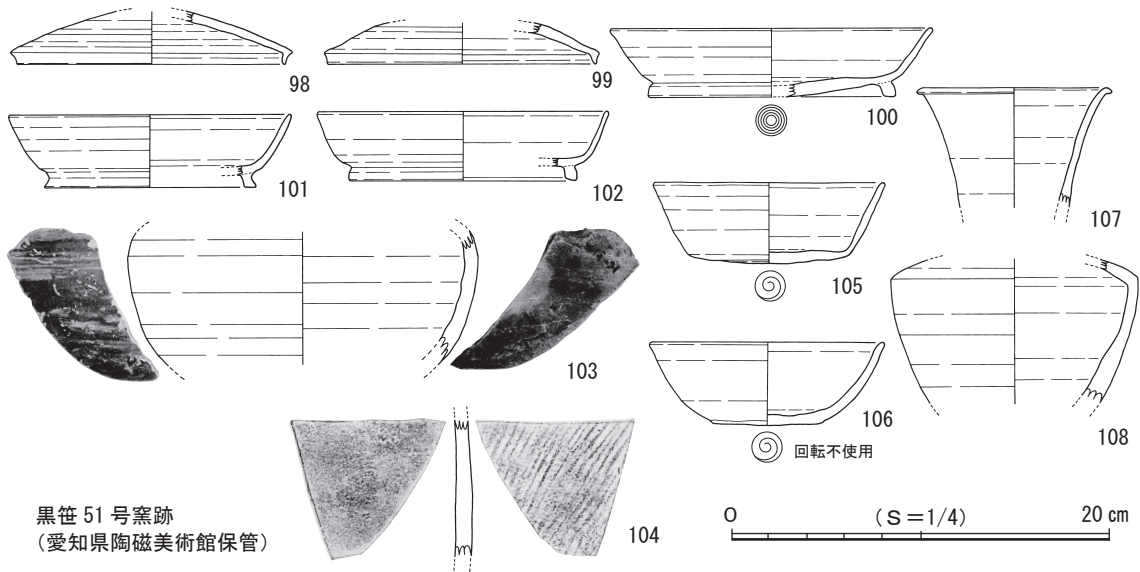
出土遺物の内、供膳具のいくつかについて示しておく。第 8 図－ 91 は杯蓋で、口縁部は折れて下方に垂下する。第 8 図－ 92・93 は有台杯身で、92 は底部に回転糸切痕が残り、底部と口縁部の境界の屈曲が不明瞭である。高台の断面形は四角形を呈し、端部は水平に接地する。93 は底部が出尻となり、底部と口縁部の境界の屈曲が不明瞭である。高台は断面四角形を呈し、端部下面は水平である。94 は底部に回転糸切痕を残す無台杯身である。95 は底部が静止ヘラ削りで仕上げられた無台杯身である。97 はつぶれ気味の断面矩形の高台をもつ合子で、高台の内端で接地する。96 は椀として扱われているものだが（嘉



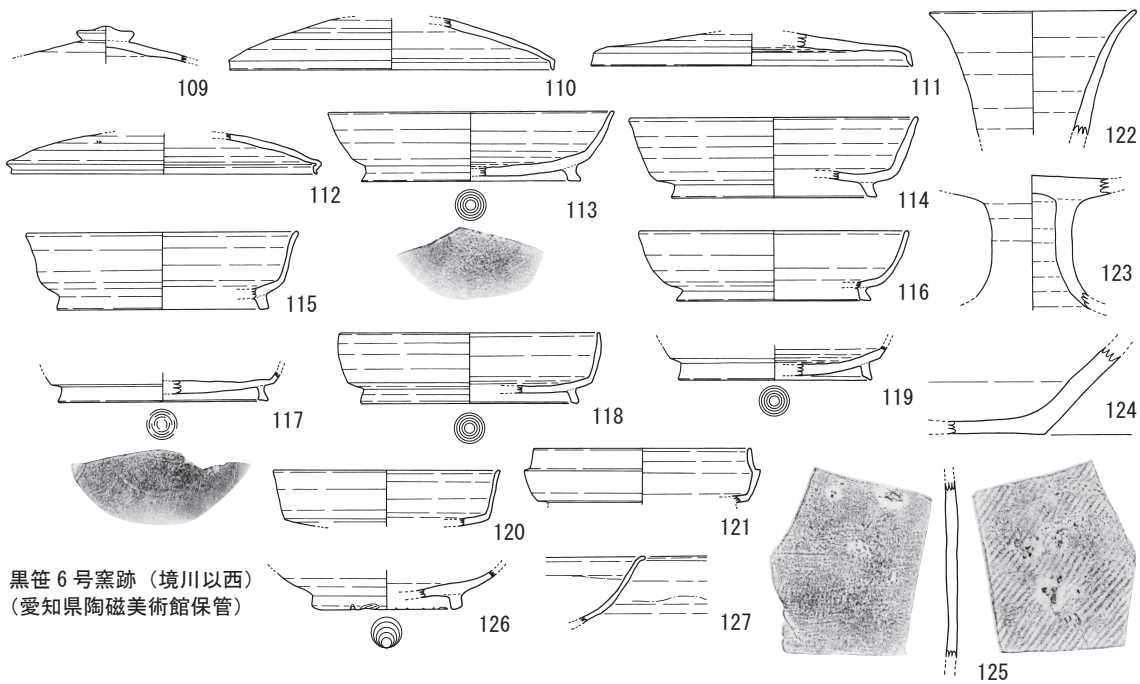
第 7 図 猿投窯黒笹地区の窯跡出土資料①（実測図：74～84（大西 2022）、88～90（大西 2021））



黒笹 41号窯跡 (みよし市立歴史民俗資料館蔵)



黒笹 51号窯跡
(愛知県陶磁美術館保管)



黒笹 6号窯跡 (境川以西)
(愛知県陶磁美術館保管)

第8図 猿投窯黒笹地区の窯跡出土資料② (実測図: 98~125 (大西 2021))

見ほか 1997)、無台碗としては異質な形状であること、97 が合子として蓋受け部をもつことを考えると、96 は合子の蓋として捉え得ないかと考えている。口径自体は、図化した 96・97 では合わないが、複数の法量の蓋・身が製作されていた可能性もあり、他に合子の蓋と捉えることができる資料が無いことから、可能性は考慮すべきと思われる。今後、他の窯跡や消費地遺跡において、合子の蓋・身のセットが出土していないか、探索する必要がある。

(5) 黒笹 51 号窯跡

みよし市打越町に所在する須恵器窯で、1956 年には流土のため窯壁が露呈しており、窯床のみ残存とされている（檜崎 1956）。その後、1980 年段階では滅失となっており、発掘調査は実施されていないが、表採資料の実測図が掲載され、高蔵寺 2 号窯式期の代表例として示されている（伊藤・加藤・齊藤編 1980）。現在でも本窯の窯式期は高蔵寺 2 号窯式期として示されている（愛知県史編さん委員会 2015）。

本窯の出土品について、改めて実測図作成を行った（大西 2021）。第 8 図 - 98・99 は口縁部を下方に折り返し、端部に向けて外反あるいはやや凹む形となる杯蓋で、99 は折り返し上方でやや凹みをもつ。100～102 は有台杯身で、100 の底部は回転ヘラ削りにより仕上げられる。いずれも高台端部は水平なし外端で接地し、断面は四角形あるいは撥形を呈する。底部と口縁部の境界は不明瞭である。103 は壺、104 は甕で、103 は外面に黄土がハケ塗りされている。105 は無台杯身で、底部には回転糸切痕を残す。106 は無台碗で、底部には静止糸切痕を残す。107・108 は肩の折れる台付長頸瓶である。

注目されるのは 106 の糸切痕を残す無台碗が出土していることで、これは岩崎 25 号窯式期以降の特徴とされるものである（檜崎 1983、檜崎・齊藤 1984、城ヶ谷 2015a）。杯蓋の口縁部や有台杯身の高台形態、回転糸切をもつ無台杯身も、高蔵寺 2 号窯式期よりも岩崎 25 号窯式期の特徴を示しているものと考えられる。岩崎 25 号窯式期には、肩の折れる台付長頸瓶が消失し、丸肩の長頸瓶へ移行するとされるが（檜崎 1983、檜崎・齊藤 1984）、本窯では前者が出土し、後者は未確認である。しかし、先述した黒笹 41 号窯跡では、両者が出土しており（嘉見ほか 1997）、実際には岩崎 25 号窯式期を通して新旧の形態が入れ替わったものと考えられ、肩の折れる長頸瓶の存在のみをもって本窯を高蔵寺 2 号窯式期まで遡らせることは難しいと考える。

以上のことから、黒笹 51 号窯跡は岩崎 25 号窯式期に位置づけられ、猿投窯内では数少ない岩崎 25 号窯式期の窯跡数を一つ増やすことになる。なお、本窯が高蔵寺 2 号窯式期の代表例として示された 1980 年段階は、岩崎 25 号窯式の設定（檜崎 1983）以前であり、岩崎 25 号窯式を考慮するか否かで、当時と本稿で認識差が生まれることは不自然でない。

(6) 黒笹 6 号窯跡

愛知郡東郷町諸輪に所在する須恵器窯で、1956 年には灰層の大半が露呈していたとされている（檜崎 1956）。発掘調査は実施されていないが、1980 年には高蔵寺 2 号窯式期として一覧表に掲載され（伊藤・加藤・齊藤編 1980）、現在でもこの窯式期で理解されている（愛知県史編さん委員会 2015）。先の黒笹 93 号窯跡と同様、境川以西の窯跡となるため、単純に境川の東西で尾張・三河を区分するのであれば尾張東

部の窯跡になるが、黒笹地区の窯跡としてここでは合わせて取り上げることとする。

本窯の出土品について、実測図作成を行った（大西 2021）。第 8 図 - 109 ~ 112 は杯蓋で、口縁部は 110・111 のように下方に折れ、端部は強く外反しないものが基本である。ただし、112 のように口縁部の折れから端部までが「く」の字に強く屈曲し、折れの上方が凹むものもある。113 ~ 119 は有台杯身で、底部は回転ヘラ削りないし回転ナデで仕上げられている。高台の断面形は撥形（113、117）、台形（116、118、119）、平行四辺形（114）、矩形（115）を呈するものとバリエーションがある。高台端部は、水平ないしやや内端で接地するもの（113 ~ 116）、外端で接地するもの（117 ~ 119）がある。底部と口縁部の境界は、不明瞭なもの（113、114、116）、明瞭に折れて高台が底部際よりも少し内に入ったところに付けられるものがある（115、117 ~ 119）。120 は有台ないし無台杯身で、底部と口縁部の境界は明瞭に折れる。121 は高台を有する合子、122 は肩の折れる台付長頸瓶、123 は高盤である。124 は平底の甕底部、125 は内面無文当具で外面に平行タタキ痕をもつ甕胴部である。126、127 は他よりもあきらかに時期の下る灰釉碗で、折戸 53 号窯式期に比定できる。

以上、本窯の出土品は、先の黒笹 51 号窯跡出土品と共通する特徴をもつものが多く（110、111、113、114、116、122）、むしろ高蔵寺 2 号窯式期に積極的に遡らせ得る資料に乏しいことから、岩崎 25 号窯式期に定点が求められる。121 の合子も、先の岩崎 25 号窯式期に比定される黒笹 41 号窯跡や岩崎 25 号窯跡（檜崎・齊藤 1984）で出土しており、本窯を岩崎 25 号窯式期に比定することに矛盾しない。ただ、112、117 ~ 120、123 は、岩崎 25 号窯式期よりも鳴海 32 号窯式期の特徴（檜崎・齊藤 1984）をよく示すものである。122 のような肩の折れる台付長頸瓶等、鳴海 32 号窯式期に完全に下らせるのには違和感を覚える資料もあるため、本窯の時期は岩崎 25 号窯式期から鳴海 32 号窯式期にまたがるものとして考えたい。これにより、先述の黒笹 51 号窯跡と同様、猿投窯内では数少ない岩崎 25 号窯式期の窯跡数を一つ増やすことになる。なお黒笹 51 号窯跡の際と同様、本窯の窯式が示された 1980 年段階は岩崎 25 号窯式の設定以前であり、岩崎 25 号窯式を考慮するか否かで、当時と本稿で認識差が生まれることは不自然でない。なお、126、127 の灰釉碗については小片で量も少なく、本窯の須恵器の時期と大きな開きがあるため、周辺の窯跡等からの混入と考えられる。

おわりに

ここまで取り上げた、8 世紀前半までの西三河の須恵器窯の推移・分布をまとめたものが第 1 表・第 9 図である。高蔵寺 2 号窯式期以降（「西三河第 II 期」とする）とそれ以前（「西三河第 I 期」とする）で大きく二つの展開が考えられる。

西三河第 I 期では、賀茂郡の上向イ田窯跡群及び額田郡の追狭間窯跡で局所的な須恵器生産が行われる。とくに上向イ田窯跡群では操業の空白期をもちつつも、合計すると長期にわたって同一の窯群内で操業が行われている。上向イ田窯跡群産の埴輪を出土する古墳や、周辺の古墳群の様相から、本窯跡群は増加する後期古墳やその母集団である集落に対して、埴輪や須恵器の供給を担ったものと評価されている（森ほか 2009、森 2015）。額田郡の追狭間窯跡については、岩崎 17 号窯式期に単独で存在した須恵器窯であり、

第1表 8世紀後葉までの西三河の須恵器窯の推移（愛知郡内の黒笹地区の窯跡を含む）

窯式期(型式期)	愛知郡(黒笹地区)	賀茂郡	碧海郡	額田郡
高蔵寺23・47型式期	(未確認)	上向イ田窯跡群 陶邑窯系窯 (空白期)	(未確認)	(未確認)
東山10号窯式期		上向イ田3号窯跡1次窯と4号窯跡(埴輪並焼) (空白期)		
東山61号窯式期		上向イ田5・6号窯跡		
蛭ヶ池窯式期		上向イ田3号窯跡2次窯		
東山44号窯式期		上向イ田2号窯跡 (空白期)		
東山15号窯式期				
岩崎101号窯式期				
岩崎17号窯式期				
岩崎41号窯式期				
高蔵寺2号窯式期		黒笹93号窯跡 ↑		
岩崎25号窯式期	黒笹6号窯跡 ↓	黒笹41号窯跡、黒笹51号窯跡	(空白期?)	
鳴海32号窯式期	黒笹地区本格化 ↓	黒笹地区本格化	東唐池窯跡群内? 井ヶ谷地区本格化	



第9図 西三河を中心とした8世紀以前の須恵器窯の分布

前後の時期の額田郡の須恵器窯は現状確認できない。額田郡内では、7世紀後半も古墳築造が継続しており、本窯が上向イ田窯跡群同様、周辺地域の古墳や母集団である集落に須恵器供給を行うために開窯されたことも考えられる。ただ、本稿で新たに示したように、硯や鈕付蓋、有台杯身といった新出の器形が生産されており、上向イ田窯跡群の出土品にこれら新出の器形がみられないことを考えると、単に古墳やその母集団への供給のみならず、寺院や官的施設を含む地域開発が築窯の契機となった可能性も想定すべきと考える。とくに硯は、墨書により文書を扱うという、それまでに無い新たな風習の流入を意味し、やはり仏教あるいは官的施設との関連を考慮すべきである。追狭間窯跡の約5km西には、西三河最古の古代

寺院で、7世紀後半の創建とされる北野廃寺も存在している（稲垣・井口・斎藤 1989、斎藤・稲垣ほか 1991、永井 2010b）。直接本窯との関連性を示すものではないが、追狭間窯跡とほぼ同時期に、周辺で新たな地域開発が進んでいたことは容易に推測でき、その過程で本窯が開窯したものと想定できるのではないか。

西三河第Ⅰ期に単発的、局所的な須恵器生産が行われたのに対し、西三河第Ⅱ期の高蔵寺2号窯式期以降は、下り松瓦窯跡の瓦・須恵器生産の時期に問題を残すが、賀茂郡、碧海郡で並行して須恵器生産がみられるようになる。また、境川以西になるが、愛知郡の黒笹地区西端でも須恵器生産が開始された可能性が高い。同時多発的なあり方は、西三河第Ⅰ期と異なっている。碧海郡では断絶を挟む可能性が高いが、岩崎25号窯式期に至って愛知郡・賀茂郡の黒笹地区で少なくとも3基の窯跡が確認され、黒笹地区が窯業地として定着していく様子を読み取れる。当該期の猿投窯では、他に岩崎地区に2窯が確認されているのみである。高蔵寺2号窯式期まで東山地区・岩崎地区が猿投窯の中心的な地区であったのに対し、鳴海32号窯式期以降、8世紀後半に黒笹地区が急速に拡大し、中心的役割を担うようになることを考えると（愛知県史編さん委員会 2015）、岩崎25号窯式期の黒笹地区の動きはその下地となったものと考えられる。

8世紀後半に猿投窯の核となる黒笹地区と折戸地区については、高蔵寺2号窯式期に点々と窯が出現する。この拡散のあり方が、それまでに東山地区から順次みられた同心円的、漸進的なものと異なり、距離を保って一気に猿投窯全体に広がることから、計画的な拡散が推定されている。そして、岩崎25号窯式期は尾張・三河地域での須恵器生産の一時停滞期として捉えられている（城ヶ谷 2015b）。確かに猿投窯及び尾北窯では、全体として岩崎25号窯式期に窯数が激減しているため、一時停滞期であることには変わりはない。しかし、本稿で黒笹6・51号窯跡の2基を当期に加えた結果、西三河からみた場合、高蔵寺2号窯式期に続き、岩崎25号窯式期はより須恵器生産が定着し、8世紀後半以降の地盤が整った時期と解釈したい。

上記の解釈は、これまで高蔵寺2号窯式期としてカウントされていた窯の資料を再検討した結果であるが、既に各窯のところで述べたように、1983年の岩崎25号窯式の設定（檜崎 1983）を基点に、それ以前と以後で窯式比定を変更する必要性が生じたものである。これについては、岩崎25号窯式期の設定以前に作成された猿投窯各窯の一覧表（伊藤・加藤・齊藤編 1980）において、高蔵寺2号窯式期として登録されている窯の全てが高蔵寺2号窯式期に遡らない可能性があるとする指摘が既になされていた（尾野 1993）。本稿での分析は、この指摘を追認する形となったが、猿投窯の停滞期とされる岩崎25号窯式期について、新たな解釈を行う材料を得ることとなった。本窯式期については、今後、黒笹地区以外の地区の高蔵寺2号窯式期の窯跡について再検討を行った後、再度分析を行う必要性を感じる。

話がそれだが、西三河第Ⅱ期は、当地が猿投窯の一翼を担う下地を形成した時期であり、西三河の窯業史上極めて重要な時期であることを強調しておきたい。そして、当期が伊保廃寺（伊保古瓦出土地、伊保白鳳寺跡）の創建、ないし機能した時期と重複する。窯業史と寺院史、集落史を交えての古代西三河の地域開発史の復原に対し、本稿が少しでも分析素材を提供できていれば幸いである。

【謝辞】本稿を執筆するにあたり、下記の方々・機関に御協力・御助言いただきました。末筆ながら深謝申し上げます。

伊藤久美子、鷗飼堅証、河野あすか、北嶋未貴、野村啓輔、平井義敏、岡崎市美術博物館、刈谷市歴史博物館、袋井市教育委員会、みよし市立歴史民俗資料館

なお、本稿で実測図と拓本を掲載した袋井市衛門坂窯跡群の資料については、袋井市教育委員会の格別の御配慮で未報告資料の実測図・拓本作成、掲載の承諾を得たものであり、第4図の実測図は転載不可である。

参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系 愛知県
愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系 愛知県
浅田博造 2006『下原古窯跡群』春日井市教育委員会
浅田博造 2015「下原第2・3・6～8号窯」「下原第4・9・10号窯」『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系 愛知県
荒木 実 1974「東山10号古窯址の遺物」『古代人』第30号 名古屋考古学会
伊藤 昌・大橋 勤・森 鋼一・斎藤嘉彦・久永春男 1969『来姓遺跡群・上向イ田古窯址群』猿投町誌編集委員会
伊藤 稔・加藤安信・齊藤孝正編 1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』(I) 愛知県教育委員会
稲垣晋也・井口喜晴・斎藤嘉彦 1989「第8節 北野廃寺」『新編 岡崎市史』史料 考古 下 16 新編岡崎市史編さん委員会
稲垣 僚 2020「飛鳥時代の南伊勢地域と須恵器の絶対年代―昼河 C-12号墳と河田 C-12号墳を対象に一」『三河考古』第30号 三河考古刊行会
井上喜久男 2010「第2章 古代の猿投山西南麓古窯跡群」『新編 三好町誌』資料編 考古 みよし市
井上喜久男 2015「30 K-91号窯(下り松瓦窯)」『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系 愛知県
岩崎直也 1987「東海及び周辺における須恵器生産の成立」『第8回三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所
内山邦夫 1978「卓ヶ洞須恵器古窯址群」『尾張旭市の古窯』尾張旭市教育委員会
大西 遼 2017「窯跡資料からみた東山窯開窯期の再検討」『考古学フォーラム』23 考古学フォーラム
大西 遼 2018「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅰ―猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査―」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』23 愛知県陶磁美術館
大西 遼 2019a「古墳・飛鳥時代の猿投窯系須恵器工人の動向―猿投窯系窯の整理を通して―」『東海窯業史研究論集』Ⅱ 東海窯業史研究会
大西 遼 2019b「古墳時代伊勢地域の須恵器生産の展開～系統・傾向の整理を通して～」『Mie history』Vol.26 三重歴史文化研究会
大西 遼 2021「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅳ―猿投窯黒笹・東山地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館研究紀要』26 愛知県陶磁美術館
大西 遼 2022「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅴ―猿投窯黒笹地区出土須恵器、中世猿投窯出土重要陶片の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館研究紀要』27 愛知県陶磁美術館
大橋 勤 1982「愛知県西加茂郡三好町下り松古窯址について」『学校紀要』6 愛知県立猿投農林高等学校
小笠原好彦・西弘海 1976「第Ⅴ章 考察 2 土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ―内裏北外郭の調査― 奈良国立文化財研究所
岡本直久ほか 2016『卓ヶ洞2号・3号・4号窯跡発掘調査報告書』尾張旭市教育委員会
尾野善裕 1993「猿投窯黒笹地区の成立と瓦生産―下り松瓦窯の操業時期をめぐる―」『三河考古』第5号 三河考古刊行会
尾野善裕 1997「尾張・西三河(窯跡) 猿投・尾北・その他」『古代の土器』5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編) 古代の土器研究会
尾野善裕 2009「上向イ田窯出土の須恵器をめぐる」『上向イ田窯』豊田市教育委員会
尾野善裕 2010「Ⅶ 考察―H-61号窯の調査をめぐる諸問題―」『東山61号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室
笈 和也 2021「西三河地域の古代寺院・瓦窯の軒瓦編年とその様相」『三河考古』第31号 三河考古刊行会
梶原義実・田中哲史 2020「第6章 考察」『東山118号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室
嘉見俊宏 1998『南部畑総地内埋蔵文化財発掘調査報告書(K-69・K-71)』三好町教育委員会
嘉見俊宏ほか 1997『社団法人愛知県トラック協会研修センター用地内埋蔵文化財発掘調査報告書(K-27・K-41・K-59・K-64・K-G-73)』三好町教育委員会
神谷久雄・森 鋼一・大橋勤・伊藤 昌・沢田 樹ほか 1968『猿投町誌』猿投町誌編集委員会
萱室康光・藤田充子 2000「藤谷窯跡群発掘調査報告」『津市埋蔵文化財センター年報』4 津市埋蔵文化財センター
小玉道明 1996「三重県鈴鹿市稲生山古窯址群発掘調査報告」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号 三重県埋蔵文化財センター
齊藤孝正 1986「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』第2号 名古屋大学総合研究資料館
齊藤孝正・伊藤 稔・加藤安信編 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告』(Ⅲ)(尾北地区・三河地区) 愛知県教育委員会
斎藤嘉彦 1989「第13節 追狭間古窯」『新編 岡崎市史』史料 考古 下 16 新編岡崎市史編さん委員会
斎藤嘉彦・稲垣晋也ほか 1991『国指定史跡 北野廃寺』岡崎市教育委員会
島田莉菜・梶原義実 2021「西三河地域の古代寺院における瓦生産―伊保古瓦出土の丸瓦・平瓦を中心に―」『三河考古』第31号 三河考古刊行会
城ヶ谷和広 2015a「第5節 編年論 須恵器」『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系 愛知県

- 城ヶ谷和広 2015b 「第3節 奈良時代の須恵器生産」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県
- 杉浦 知・久永春男ほか 1997 『刈谷市の考古資料図録—谷沢靖氏寄贈資料Ⅱ—』刈谷市教育委員会
- 鈴木敏則 2004 『有玉古窯』浜松市教育委員会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 谷沢 靖 1956 『『東唐池第一号古窯』の調査』『野帳』2 野帳の会
- 谷沢 靖・加藤岩蔵・久永春男 1958 『刈谷市の古窯』刈谷市誌編纂委員会
- 永井邦仁 2010a 「139 K-91号窯(下り松瓦窯跡)」『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安 愛知県
- 永井邦仁 2010b 「148 北野廃寺跡」『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安 愛知県
- 永井邦仁 2017 「147 東唐池古窯群」『新修豊田市史』資料編 考古Ⅲ 古代～近世 豊田市
- 永井義博 1989 『衛門坂古窯跡』袋井市教育委員会
- 橋崎彰一 1956 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 橋崎彰一 1957 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 橋崎彰一 1958 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 橋崎彰一 1959 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 橋崎彰一 1983 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』(Ⅲ)(尾北地区・三河地区) 愛知県教育委員会
- 橋崎彰一・齋藤孝正 1984 『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会
- 賛 元洋 2015 「162 追狭間古窯」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県
- 服部順子 2014 『豊田市西部の山茶碗窯跡』豊田市教育委員会
- 久永春男 1969 「付載第1 尾張・三河地方における古墳時代以後の須恵器」『乗鞍第1号窯址』白菊古文化研究所
- 久永春男 1997 「解説資料 谷沢靖氏と尾張・三河の古窯研究史」『刈谷市の考古資料図録—谷沢靖氏寄贈資料Ⅱ—』刈谷市教育委員会
- 久永春男・田中 稔 1966 「付載第3 尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」『豊田大塚』豊田市教育委員会
- 兵藤たみ・太田綾子・竹内登美子・脇田公子 1961 「追の狭間古窯」『古墳と古窯の研究』愛知県立岩津高等学校郷土史研究部
- 本多静雄 1955 「愛知県猿投山西南麓の古窯址群」『陶説』第24号 日本陶磁協会
- 本多静雄 1957a 「愛知県猿投山西南麓の古窯址群(一)」『陶説』第49号 日本陶磁協会
- 本多静雄 1957b 「愛知県猿投山西南麓の古窯址群(二)」『陶説』第50号 日本陶磁協会
- 本多静雄 1957c 「愛知県猿投山西南麓の古窯址群(終)」『陶説』第51号 日本陶磁協会
- 水橋公恵 2021 「Ⅶ 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷」『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第2・3・6次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 森 泰通 2015 「11 上向イ田3・4号窯」『新修豊田市史 資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳』豊田市
- 森 泰通ほか 2009 『上向イ田窯』豊田市教育委員会
- 山田邦和 2011 「須恵器の編年 ①西日本」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 米山浩之 2000 「遺跡紹介① 津市の窯跡」『埋文センターニュース』第12号 津市埋蔵文化財センター

